異文化適応の心理学についての研究（その 1）

－中国人留学生を対象に－

Study on intercultural adaptation of foreign students in Japan (1)

李艶　　猪田早規＊
Li Yan　　Inoda Sachi

キーワード: 対人関係（Interpersonal relationship）
異文化適応（Intercultural adaptation）
在日留学生（Foreign students in Japan）

要　旨

本研究は中国人留学生を対象に，異文化適応について，日本人学生との人間関係が日本語能力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

調査は改訂版友人関係尺度と日本語能力試験の自己評価リストを参考に質問紙を作成し、調査を行った。

改訂版友人関係機能尺度の因子分析を行った結果，留学生の人間関係は 5 つの因子構造をしていることが明らかになった。

また，日本語能力試験の自己評価の結果から，「日本語が出来る」と自己評価する人が約 8 割と高いので，友人関係の心理構造と深い関係があることが分かった。よって，留学生の日本人との人間関係は日本語能力の向上に影響を与え、さらに異文化適応の過程に影響する可能性があると考えられる。

本研究の結果は留学生の受け入りに示唆を与えることが期待できる。

また，本研究の続きは半構造化面接法を使い、質的調査も行った。＊＊

本論文は心理学研究分野での研究倫理を遵守し、完成したものであることを表明する。

＊聖泉大学の卒業生　＊＊「（異文化適応の心理学についての研究（その２））

問題

1983 年に、文科省が 21 世紀への留学生政策に関する提言の中で、いわゆる「留学生受け入れ 10 万人計画」を策定して以来、日本に渡来する外国人留学生の人数は急激に増加している。1983 年当初には 10,428 人に過ぎなかった外国人留学生が、1990 年には 41,347 人に増え、2008 年時点では 123,829 人に膨らんでおり、その中でも中国人留学生が全体の 58.8%と留学生全体の半数以上を占めている（ 日本学生支援機構, 2018）。また 2008 年 7 月には、文部科学省は 2020 年を目途に「留学生 30 万人計画」と大幅な受け入れ方針を表明している（ 文部科学省 HP, 2008）。

留学生が増加する一方で、留学先での問題の発生が懸念される。2019 年 6 月、東京福祉大学で、学部研究生ら海外からの留学生 1600 人超が所在不明になっているとした調査結果が文部科学省から公表されたが、この問題の問題点として、文科省と出入国在留管理局は「留学生の不適切な受け入れや不十分な管理体制が大量の所在不明者を発生させた」としている。2016 年度以降、それまで数十人規模だった同研究生を一気に 1000～2000 人以上に増やしたものの、入学選考で求められる日本語能力レベルを大幅に下回る研究生が多数在籍していたという。

先行研究において、日本にいる留学生は、日常生活における悩みや困難として、「日本語の困難」「勉強面の困難」「経済の困難」の大きいことが報告されている（ 岡・深田, 1994）。それ故、在日留学生の心身の健康に関する研究が注目されるようになった。

松原・石隈（1993）は、外国人留学生からの相談内容について、「言語の問題」「経済の問題」「生活の問題」「健康の問題」「修学の問題」「人間関係の問題」「文化の問題」の順で多かったことを述べている。さらに加納・村田（1994）は中国人留学生が「日本人との人間関係」「日本人の考え方・価値観」に慣れるまで最も時間を必要とすると報告した。

横田（1991）は、大学内で留学生と日本人学生が親密な関係形成を阻む要因として、留学生からは「言葉の壁」「日本的習慣」「対人関係形成の違い」が挙げられ、日本人からは「暗黙のルールが通用しないことへの不安」「無関心」などが挙げられた。

在日留学生の健康と困難の問題が注目される中、対人関係上の問題として、いくつかの研究が行われている。

対人関係上の困難として行動上の困難や問題点が挙げられた（ 田中・藤原，1992）。また、社会的困難度が高く、葛藤経験として多く挙げられたものは自己主張であった（ 加賀美，2003）。さらに、対人関係の困難に関する原因認知では、スキルの不足が原因であり、対人関係にとってスキル（日本語能力）の重要性が確認されたと説明している 。

また、特に、在日中国人留学生のストレスについて、英語を母語にする留学生との比較をした研究では、中国語群は英語圏より精神健康度が悪い傾向にあり、「経済的困難」や「日本社会への適応」の面でストレスを感じていることが分かった（ Ozeki ,Knowles, Ushijima. & Asada. 2006)。

以上のことから、在日留学生には、言葉、経済、対人関係などさまざまな領域で困難な問題を抱えていることが明らかになった。その中でも、留学生の困難な問題として対人関係面の問題が多く取り上げられていることがわかる。このことから、在日留学生には、人間関係の問題が困難として強く認識されていることが明らかである。それ故、対人関係によるストレスは極めて大きいと考えられる。

渡邊,今野（2011）は、異文化適応には様々な定義があり、研究者間で異なっていると述べている。たとえば、周（1995）は異文化適応を「個人と他の文化圏、社会あるいは国家の人たちとの間に調和のとれた満足すべき関係が保たれている状態」と考えた。山岸（1995）は、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人々との好ましい関係を持ち、個人にとって意味のある生活が可能になること」と述べている。田中（2000）は、異文化適応を「心身が健康で、社会的にも良好な状態で課題達成を遂げており、異文化特性に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしていること」と論じている。

以上に挙げた 3 つの異文化適応の定義は、適応を調和のとれた好ましい状態として捉えており、異文化適応は静謐なものであることを述べている。

これに対して、高井（1989）は、異文化適応を「ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である」としている。高井 (1989) によれば、個人が環境の変化のどの側面にどの程度達成できるか、また、どのような経過をたどって達成できるかが問題とされ、異文化適応を心理的な「過程」として捉えた。 さらに、江渕 (1991) は、異文化に適応していくことは、自他調整の過程である

と定義し、「 異文化の適応とは自己との内面的環境との闘いであり、自己挑戦、自己変革の過程」であると述べている。

Trompenaars and Charles (1997) は、異文化適応の際に生じる問題を、①人間関係、②時間に対する態度、③環境に対する態度の 3 つに分類している。①の人間関係においては、さらにそれぞれの文化によって５つの相反する価値観(普遍的；個別主義、個人主義；共同体主義、感情中立主義；感情表出主義、関与特定的；関与拡散的、達成型地位；属性型地位) が存在する(平田，2014)。②の時間に対する態度とは、時間に対する価値観の違いから生まれるものである。③の環境に対する態度とは、環境に影響を与えるものへの考え方の違いから生まれるものである。

以上の異文化適応に関する先行研究を総括して、**本研究では、異文化適応とは**「個人が自身の生まれ育った社会環境から離れ、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程にて、文化的・言語的背景の異なる人々との好ましい関係を持ち、個人にとって意味のある生活が可能になること」と定義することとする。

人々は、自分が生まれ育った文化以外の文化に接触した場合には、言葉の障害も加わり、新しい文化の中でうまくやっていくことは容易ではなく、心理的に混乱した状況に陥ることが多い。これがカルチャーショック(culture shock) と呼ばれるものである。

カカルチャーショックとは、オバーグ(Oberg, K. , 1960) によって紹介された概念とされている。カルチャーショックについてのさまざまな定義を検討した星野(1980) は、「文化ショックは一般には、個人が自身の文化が持っている生活様式・行動規範・人間観・価値観とは多かれ少なかれ異なる文化に接触した時の、当初の感情的衝撃・認知的不一致として把握されることが多いが、決してそれだけにとどまらず、それに伴う心身症状や、累世的に起こる潜在的・慢性的パニック状態である」と定義している。また、サイコセラピスト(心理治療家) の近藤(1981) は、カルチャーショックを「異文化との接触において生ずる心理的反応の状態」と表現し、その反応の仕方は個人によって異なり、「軽度の当惑感病的な症状からパニック感や精神的障害など、かなり強度の症状を生じさせるものまでいろいろある」こと、「瞬間的なショック現象で終わるよりも、一定の時間にわたって生ずる現象である」ということを述べている。すなわち、カルチャーショックは、異文化との接触において生じる、個人によって異なる、さまざまな心理的反応の状態やそれに伴う身体的症状と言えるだろう。

留学生の日本語能力について述べる。

学部留学生に必要な日本語能力とは何かについて、日本留学試験の「日本語シラバス」「測定対象能力」の記述によると、この試験は日本での留学生活を送る上で、日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか、また、自国での初等・中等教育修了までに習得した知識を前提としながら、日本の大学での学習・研究活動を行うための日本語能力があるかどうかを測定する言語テストであり、かつ、標準テストである。」と述べられている。つまり、日本語によるコミュニケーション能力、および日本の大学での学習・研究活動を行うためのスキルという二つの部分に分けられていると考えられる。

また、堀井（2008）は日本の大学での勉学に対応できる日本語力とは、「日本語による講義を聞き取り理解する力，大量のテキストや資料，参考文献などの読解力，レポート・論文や発表のための情報収集力，レポート・論文を書く力，発表をする力，学内でコミュニケーションをとり人間関係を作る会話力などである」としている。また、以上の能力は、知識や形式的なスキルだけでは得られない、総合的に「学び」につながる力であると捉えている。 さらに，大学に入学してから、大学の講義や文献の理解力、レポート作成に求められる聴解力、読解力、文章表現力は大学入学後にすぐに必要とされ、それらはその後に続く専門ゼミでの発表、卒論作成のための文章・口頭表現力の基礎能力となるとしている。さらに，以上で述べた学習・研究活動を通して訓練・蓄積された論理的・分析的思考力および表現力は今後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動に必要な日本語力へとつながっていくとも考えている。

研究の目的

以上述べた先行研究にて、在日留学生には、言葉、経済、対人関係などさまざまな領域で困難な問題を抱えていることが明らかになり、その中でも留学生の困難な問題として対人関係面の問題が多く取り上げられていることが分かった。在日留学生には、人間関係の問題が困難として強く認識されていることが明らかであり、それ故、対人関係によるストレスは極めて大きいと考えられるだろう。

ここで特記すべきことについて、先行研究にて度々言われている在日留学生の出身地域である。田中・藤原(1992)の指摘によると、研究対象の出身地域が違うと、得られる結果が大きく異なるという。

筆者は、異文化適応を検討する場合は、研究対象の出身国の限定が必要であると考え

る。これは、留学生の適応研究を行う場合、一つの国の留学生に限定した研究の方が、文化的要因をコントロールすることが出来るからとされている。

在日中国人留学生は、日本に来ている留学生の中でも、半数以上を占めているが、中国人留学生だけを対象とした研究はあまり多くない。さらに、中国からの留学生は今後も増加する傾向にある。このことから、中国人留学生の日本での適応に関する研究は有意義なものであると考える。

また、上記で述べた通り、先行研究にて留学生の異文化適応にとって対人関係が重要な役割を果たすことが示唆されているが、その対人関係を円滑に回すために、必要なものとは何だろうか、と考えたときに、必須と言えるものは日本語能力であると考えられる。日本という異文化の中で、日本人と対人関係を築くには、日本語を話せないと難しいと考えられるからだ。対人関係が留学生の異文化適応に対して重要な役割を果たすことで、日本語能力、留学生が日本という異文化に適応するために重要な役割を果たすと言える。

よって、本研究では、在日中国人留学生の異文化適応に関連する要因について検討し、具体的に、日本人学生との人間関係が、中国人留学生の日本語能力に影響を及ぼすのか、その関連性についても探ることを目的とした。

方法

1.　調査協力者

本調査(質問紙)の協力者は、日本の私立大学に在籍している中国人留学生 55 名である(男性 21 名、女性 34 名；平均年齢 20.9 歳）。

(研究 2)＊のインタビュー法の調査協力者は、同じく日本の私立大学に在籍している中国人留学生 46 名である。なお、インタビュー調査の調査協力者は、質問紙調査の協力者とは別の中国人留学生である。

調査協力者は在日一年以上の中国人留学生である。

調査場所は私立大学、県内の国際交流会館等である。

＊　研究２「本誌の「異文化適応の心理学についての調査研究（その２）」

3.調査方法

① 改訂版友人関係機能尺度

人間関係を測定する尺度であり、丹野(2008) によって作成された。改訂版友人関係機能尺度は、全 45 項目から構成される(表 1 参照) 。採点方法としては 5 件法を用い、「あてはまる」5 点、「ややあてはまる」4 点、「どちらともいえない」3 点、「あまりあてはまらない」2 点、「あてはまらない」1 点として、下位尺度ごとに項目の評定の平均値を算出した。

表1　改訂版友人関係尺度　項目表

42	Aさんは自分の人生を語るうえで欠かせない存在であると思う。
38	Aさんとの関係で、「新しい自分」に気付くことがある
36	Aさんとの関係で、新しい考え方に気が付くことがある
43	Aさんと出会ったことで、自分の人生は変わったと思う
45	Aさんのおかげで、自分の人生は有意義なものになっていると思う
44	Aさんとの関係が無ければ、今の自分はいないと思う
37	Aさんとの関係は、自分自身の成長にとって重要だと思う。
12	Aさんとの関係は、何があっても切れないと思う
35	Aさんは、自分を大切にしてくれていると思う
39	Aさんから学ぶことが多い
32	Aさんは、自分を好意的に評価してくれている
19	Aさんが近くにいない時も、どこかでお互いのことを気にかけている
10	Aさんは趣味や娯楽の仲間である
17	Aさんはいわゆる「心の友」である
29	Aさんは普段から私を助けてくれる
22	Aさんは自分の悩みを打ち明けてくれる
24	Aさんは、他の人には出来ないような真剣な話をすることもできる
16	Aさんとは、絆のようなもの感じる
9	Aさんと遊ぶのは、他の友人と遊ぶのとは異なる楽しさがある
40	Aさんから、影響を受けることが多い
33	Aさんは、自分の良い部分を褒めてくれる
15	Aさんとは、長い付き合いになると思う
18	Aさんとは、つらい時に励まし合う仲である
21	Aさん、良い相談相手である
11	Aさんは、生涯の友になると思う
41	Aさんと過ごした時間は、今後人生でも重要な意味を持つと思う
14	Aさんとは一緒に人生を楽しんでいけると思う
30	Aさんとは、本当困ったときに助けあうと思う
13	Aさんとは、年を取っても友人でいたい
20	Aさんがつらいと自分もつらく感じる
31	Aさんとは、自分の存在を受け入れてくれる
7	Aさんと一緒にいると楽しい
3	Aさんとは、気楽に付き合える
5	Aさんとの関係は、とても安心する
1	Aさんと一緒にいると、なんとなく楽だ
8	Aさんと話すと、とても愉快な気分になることが多い
4	Aさんとの関係は、とても心地よい
2	Aさんとは自然に一緒にいられる
6	Aさんと一緒にいると、退屈しない
27	Aさんは、頼れる存在である
28	Aさんがいると、とても助かる
23	Aさんとは、愚痴を言い合える
26	Aさんはいざという時、力になってくれる
34	Aさんは、私に居場所を作ってくれる
25	Aさんには、何でも話せる

項目の順番はカテゴリごとに並べた。

②日本語能力試験 Can-do　自己評価リスト

日本語能力試験にて、「日本語能力試験の各レベルの合格者が、日本語でどんなことができると考えているか」を受験者の自己評価にて測るリストを使用した。この自己評価リストでは、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの技能について、「周りの人との雑談や自由な会話で、だいたいの内容が理解できる」（「聞く」の一例）のような行動を記述した文（Can-do 項目）を表記している。なお、本研究では、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの各技能の質問項目、それぞれから、各技能で 4 つの質問をランダムに抜き出し、全 16 項目からなるように作成した（表 2 参照）。

回答方法は各項目で、まずその内容をしたことがあるか（経験）、回答は「ある」または「ない」、

次はどのくらいできるか（自己評価）、回答は「4：できる」「3：難しいがなんとかできる」「2：あまりできない」「1：できない」の 4 段階で答えた。

表2　日本語能力　自己評価リストの項目

1	思いがけない出来事(例：事故)についてのアナウンスを聞いてだいたい理解出来る
2	関心あるテーマの講義や講演を聞いて、だいたいの内容が理解できる
3	周りの人との雑談や自由な会話で、だいたいの内容が理解できる
4	簡単な指示を聞いて、何をすべきか理解が出来る
5	相手や状況に応じて、丁寧な言い方とくだけた言い方が使い分けられる
6	講義でのディスカッションなどで、相手の意見に賛成か反対かを理由とともに述べることが出来る
7	身近で日常的な話題(例：趣味、週末の予定)について会話が出来る
8	自己紹介したり、自分についての簡単な質問に答えたりすることが出来る
9	関心のある話題についての専門的な文章を読んで、だいたいの内容が理解できる
10	駅の時刻表や案内板を見て、自分が乗る電車の時間が分かる
11	身近で日常的な話題についての新聞や雑誌の記事を読んで、内容が理解できる
12	新聞の広告やチラシを見て、安売り期間や値段などがわかる
13	自分の関心のある分野のレポートを書くことが出来る
14	理由を述べながら、自分の意見を書くことが出来る
15	知人に、感謝や謝罪を伝える手紙やメールを書くことが出来る
16	簡単な自己紹介の文を書くことが出来る

なお、本調査において、すべての質問紙は、日本語版にふりがなを振ったものを使用した。

本研究では、上記で述べたが、日本人との交友関係が、在日中国人留学生の日本語能力に与える影響について調べることを中心としているので、よって、①改訂版友人関係機能尺度、②日本語能力自己評価リストの双方の結果から、その影響について分析することとする。

4.実施手続き

まず、質問紙調査に協力していただくにあたり、本調査の目的、内容、倫理とプライバシーの保護、質問紙の回答方法について説明時間を設けて教示した。

本調査には、友人関係を測ると日本語能力を調べるの 2 種類の違う調査が含まれており、回答方法がそれぞれ異なるので、それについても説明した。また、内容で分からない点があれば、その場で挙手して質問をするようにと説明した。調査協力者が回答中は近くで様子を見、挙手に応じて質問について教示した。なお、回答時間は 15 分程度であった。

結果

友人関係についての結果

中国人留学生の現在の対人関係の心理構造・状況を把握するため因子分析を行った。因子の数を 5 と指定し、プロマックス回転(最尤法)による因子分析を行った。

なお、事前に質問紙の妥当性・信頼性の検討も行った。

結果について、表 4 は因子分析結果、表 5 は各因子の信頼性係数、表 6 は各因子間の相関、表 7 は各因子と項目の相関、を表している。

第 1 因子は 12 項目で構成されており、「A さんとの関係が無ければ、今の自分はいないと思う。」「A さんとの関係で、新しい考え方に気が付くことがある」といった、特定の人物との関わりが自分の考え方などに変化を与えている項目に高い負荷量を示した。よって、「情緒的成長」と命名した。

第 2 因子は 9 項目で構成されており、「A さんは他の人には出来ないような真剣な話をすることもできる」「A さんは自分の悩みを打ち明けてくれる」といった、心の内を明かすような深い関係性を語っている項目に高い負荷量を示した。よって、「信頼関係」と命名した。

第 3 因子は 10 項目で構成されており、「A さんとは長い付き合いになると思う」「A さんとは一緒に人生を楽しんでいけると思う」といった、今後も関係性が続くという展望を抱いている項目に高い負荷量を示した。よって、「関係継続展望」と命名した。

第 4 因子は 8 項目から構成されており、「A さんとは自然に一緒にいられる」「A さんとの関係は、とても心地よい」といった、関係性に安心感を抱いているといった項目に高

い負荷量を示していた。よって、「安心感」と命名した。

第５因子は６項目から構成されており、「A さんはいざという時、力になってくれる」「A さんは、私に居場所を作ってくれる」といった、心を許し、支えになってくれているといった項目に高い負荷量を示していた。よって、「友人間のサポート」と命名した。

表4　因子分析結果

項目	情緒的成長	信頼関係	関係継続展望	安心感	友人間のサポート	共通性
㊷	**.894**	-.207	.084	.128	-.092	.751
㊳	**.796**	-.095	.076	-.214	.132	.626
㊱	**.793**	-.132	.028	-.121	.126	.579
㊸	**.712**	-.032	.051	.128	.030	.623
㊺	**.709**	.017	-.123	-.194	.045	.410
㊹	**.518**	.264	-.305	.118	-.020	.382
㊲	**.504**	.285	.064	-.063	.046	.538
⑫	**.461**	.157	.157	-.101	-.126	.349
㉟	**.398**	.174	.160	.029	.186	.522
㊴	**.381**	.191	.183	.022	-.071	.386
㉜	**.347**	-.056	-.032	.302	.340	.443
⑲	**.325**	.313	.118	-.144	.051	.368
⑩	-.071	**.732**	.029	-.104	-.167	.413
⑰	-.025	**.663**	.087	-.003	-.092	.453
㉙	-.176	**.651**	.055	-.152	.368	.561
㉒	.009	**.534**	.143	-.055	.046	.387
㉔	.195	**.520**	.065	-.008	-.009	.463
⑯	.017	**.511**	.253	.075	-.063	.501
⑨	.132	**.435**	-.231	.002	.251	.316
㊵	.340	**.428**	.102	.104	-.136	.569
㉝	.095	**.311**	-.040	.290	.238	.427
⑮	.012	.015	**.890**	.015	-.216	.783
⑱	-.103	.024	**.851**	-.033	.102	.689
㉑	-.102	.081	**.534**	-.010	.326	.457
⑪	.367	.218	**.500**	-.069	-.359	.682
㊶	.278	.077	**.476**	.099	-.001	.578
⑭	-.025	.288	**.473**	-.036	.164	.502
㉚	-.107	.222	**.457**	.122	.288	.542
⑬	.036	.124	**.438**	.268	-.096	.454
⑳	.169	-.128	**.399**	-.055	.207	.266
㉛	.241	-.083	**.385**	.185	.348	.595
⑦	-.139	.102	-.059	**.912**	-.057	.793
③	.005	-.283	.068	**.869**	.041	.660
⑤	.153	-.060	-.199	**.838**	-.032	.667
①	-.041	-.345	.226	**.784**	.074	.594
⑧	-.295	.268	.046	**.759**	-.160	.681
④	.012	.195	.172	**.706**	-.148	.782
②	.020	-.112	.147	**.681**	.071	.516
⑥	-.115	.142	-.239	**.672**	.163	.460
㉗	-.014	-.149	.096	.043	**.802**	.616
㉘	-.225	.191	.378	-.115	**.555**	.528
㉓	.114	-.108	-.045	-.040	**.540**	.296
㉖	.064	-.110	.414	-.106	**.467**	.424
㉞	.289	.205	-.203	.098	**.361**	.384
㉕	.258	.184	-.242	.110	**.337**	.315
因子寄与	9.831	9.198	8.969	7.740	4.922	

第１因子である「情緒的成長」と項目㊷は数値が大きいので、関係が深かった。第３因子の「関係継続展望」では、項目⑮が最も数値が高く、「関係継続展望」と項目⑮は関係が深い、また、第４因子である「安心感」と項目⑦も非常に数値が大きく、関係が深いことがわかった。

表5　信頼性係数

	情緒的成長	信頼関係	関係継続展望	安心感	友人間のサポート
α係数	.895	.845	.892	.913	.764
ω係数	.909	.861	.914	.927	.774
因子得点	.918	.862	.907	.933	.798

各下位尺度のクロンバックのα係数は.764～ .913 であったことにより、十分に高い信頼性があると考えられる。

表6　因子間相関

	情緒的成長	信頼関係	関係継続展望	安心感	友人間のサポート
情緒的成長	1.000	.540	.514	.368	.342
信頼関係	.540	1.000	.531	.422	.330
関係継続展望	.514	.531	1.000	.364	.226
安心感	.368	.422	.364	1.000	.115
友人間のサポート	.342	.330	.226	.115	1.000

表６から、情緒的成長と信頼関係の因子間相関に、 .540 と比較的強い相関が見られた。また、信頼関係と関係継続展望の間にも、 .531 と比較的強い相関が見られた。情緒的成長と関係継続展望の間にも.514 と高い相関が見られた。

表7　因子構造(因子との相関係数)

項目	情緒的成長	信頼関係	関係継続展望	安心感	友人間のサポート
㊷	**.840**	.344	.459	.389	.179
㊳	**.750**	.328	.386	.081	.366
㊱	**.735**	.302	.350	.140	.346
㊸	**.778**	.444	.453	.399	.289
㊺	**.599**	.268	.190	.034	.243
㊹	**.540**	.425	.139	.307	.189
㊲	**.684**	.581	.462	.272	.320
⑫	**.546**	.405	.412	.177	.108
㉟	**.648**	.547	.509	.329	.419
㊴	**.561**	.479	.472	.301	.166
㉜	**.528**	.355	.303	.433	.468
⑲	**.519**	.507	.410	.157	.276
⑩	.245	**.611**	.306	.171	.046
⑰	.345	**.664**	.404	.289	.138
㉙	.274	**.642**	.338	.121	.518
㉒	.367	**.607**	.422	.232	.251
㉔	.504	**.654**	.437	.307	.244
⑯	.428	**.664**	.545	.381	.177
⑨	.335	**.467**	.125	.179	.388
㊵	.615	**.664**	.511	.431	.157
㉝	.430	**.542**	.333	.470	.397
⑮	.409	.429	**.861**	.325	-.004
⑱	.369	.439	**.821**	.260	.263
㉑	.323	.412	**.594**	.218	.437
⑪	.593	.534	**.698**	.298	-.056
㊶	.600	.522	**.696**	.407	.238
⑭	.417	.564	**.637**	.268	.353
㉚	.391	.554	**.630**	.376	.442
⑬	.394	.458	**.599**	.482	.088
⑳	.356	.221	**.445**	.122	.307
㉛	.582	.445	**.611**	.419	.512
⑦	.201	.362	.243	**.876**	.021
③	.220	.137	.246	**.781**	.065
⑤	.316	.261	.146	**.793**	.053
①	.202	.109	.324	**.714**	.088
⑧	.098	.401	.276	**.762**	-.074
④	.414	.542	.505	**.838**	.041
②	.309	.287	.361	**.702**	.153
⑥	.141	.291	.059	**.622**	.194
㉗	.245	.178	.207	.102	**.775**
㉘	.220	.405	.448	.085	**.614**
㉓	.203	.092	.064	.003	**.529**
㉖	.338	.254	.456	.076	**.534**
㉞	.455	.414	.171	.258	**.493**
㉕	.389	.353	.105	.233	**.444**

日本語能力についての自己評価の結果

本調査協力者 55 人の、日本語能力試験 Can-do　自己評価リストにおける 4 件法による各項目の合計数を算出した。

表８は回答の結果を示している。

表8　各項目回答者の合計

	1：できない	2：あまりできない	3：難しいがなんとかできる	4：できる
項目1	0	9	39	7
2	0	9	34	12
3	1	18	25	11
4	0	3	26	26
5	6	18	22	9
6	3	33	13	6
7	0	8	26	21
8	0	3	23	29
9	0	10	32	13
10	0	3	7	45
11	1	8	24	22
12	0	5	22	28
13	1	20	24	10
14	1	12	32	10
15	2	24	20	9
16	0	4	22	29
各合計	15	187	391	287

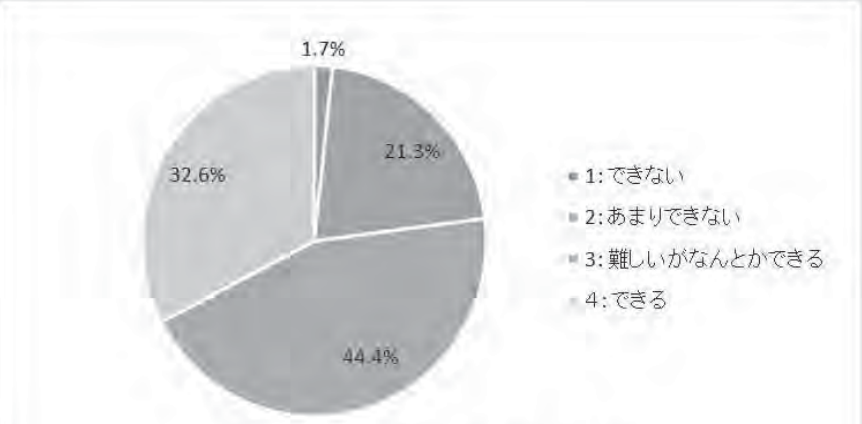

図1　各項目回答者の構成比

表８では、4 件法による各項目の合計数を算出した。

図１では、表８で示した各項目の回答者の合計の構成比を、グラフで表した。

表８の合計数から、全体の構成比として、１：「できない」が 1.7%、2：「あまりできない」が 21.3%、3：難しいなんとかできるが 44.4%、4：「できる」が 32.6%という結

果が出た。

各項目の事柄を、全体の約８割近くの人が「できる」「難しいがなんとかできる」と選んでいることがわかった。

さらに項目ごとに見てみると、項目 4 と項目 8、項目 10 では、出来る人の割合が 95%と非常に高い数値を出していた。出来ると答えた人の割合が 90%を超えた問いは、項目 4・8・10・12・16 であった。

考察

友人関係尺度、自己評価について

因子分析の結果から、留学生の友人関係にまつわる心理構造は、「情緒的成長」「信頼関係」「関係継続展望」「安心感」「友人間のサポート」といった 5 つの因子構造をしていることが分かった。

「情緒的成長」は「A さんとの関係が無ければ、今の自分はいないと思う。」「A さんとの関係で、新しい考え方に気が付くことがある」といった、特定の人物との関わりが自分の考え方などに変化を与えていること、**「信頼関係」**は「A さんは他の人には出来ないような真剣な話をすることもできる」「A さんは自分の悩みを打ち明けてくれる」といった、心の内を明かすような深い関係性を持つこと、**「関係継続展望」**は「A さんとは長い付き合いになると思う」「A さんとは一緒に人生を楽しんでいけると思う」といった、今後も関係性が続くという展望を抱いていること、**「安心感」**は「A さんとは自然に一緒にいられる」「A さんとの関係は、とても心地よい」といった、関係性に安心感を抱いていること、**「友人間のサポート」**は「A さんはいざという時、力になってくれる」「A さんは、私に居場所を作ってくれる」といった、心を許し、支えになってくれていること、が明らかになった。

その中でも、【情緒的成長と信頼関係】、【信頼関係と関係継続展望】、【情緒的成長と関係継続展望】と、それぞれの間に高い相関関係が見られることが分かった。留学生の情緒的成長が、信頼関係と関係継続展望と強く結びついており、信頼関係は情緒的成長と関係継続展望と強く結びついており、関係継続展望が、情緒的成長と信頼関係と結びついていることが分かった。この 3 つはお互いが強く結びついているので、3 つの因子の内、どれか 1 つの因子の数値が高くなれば、相関して他 2 つの因子も高くなる、ということが考

えられる。つまり、留学生の、日本人の友人に対する信頼関係が強くなれば、同じように情緒的な成長を及ぼし、同じように関係を継続したいといった感情がついてくる、と考えられる。

日本語能力試験の自己評価の結果から、比較的多くの中国人留学生が、日本語を駆使して様々なことが出来ると評価していることが分かった。できる・難しいがなんとかできるといった回答が多かったのは、項目 4・8・10・12・16 の 5 つであったことが結果から分かった。項目 4 は【簡単な指示を聞いて、何をすべきか理解ができる】、項目 8 は【自己紹介をしたり、自分についての簡単な質問に答えたりすることができる】、項目 10 は【駅の時刻表や案内板を見て、自分が乗る電車の時間が分かる】、項目 12 は【新聞の広告やチラシを見て、安売り期間や値段などが分かる】、項目 16 は【簡単な自己紹介の文を書くことができる】といったものだった。

日本語能力の自己評価リストには、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの技能をはかる項目が用意されていたが、結果から見るに、協力者である留学生たちは、ある一定の日本語能力を持ち合わせていると考察できる。

日本語能力試験の自己評価の結果から、「できる」「難しいけどなんとかできる」と答えた人の割合が、8 割と割合が高いことが分かっている。そして、友人関係機能尺度で各項目に高い相関見られた。以上のことから、友人関係の心理構造と日本語能力の自己評価の結果が、深い関係があると考えられる。

本研究の結果は留学生の受け入れと指導に何らか参考になることを期待する。

文献

Black, J, S. and Mendenhall, M. (1990) “Cross-cultural training effectiveness: A review and theoretical Framework for future research”, Academy of Management Review, Vol.15, No.1 pp.113-136

江淵一公（1991）　在日留学生と異文化間教育　　異文化間教育　5 号,P.4-20 .

本多尚子 (2017)　日本人学生と留学生との間の異文化交流：異文化コミュニケーション授業を対象とした歴ストマイニング分析

日本英語英文学= Studies in English linguistics and …, 2017 - jaell.org

堀 洋道（2011）『心理測定尺度集Ⅴ』　サイエンス社 P.185

星野命　（1980）『概説カルチャーショック』　　現代のエスプリ, 1980

加賀美　（2003）多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析
-コミュニティ心理学的援助へ向けて-　　コミュニティ心理学研究,
2003　7 巻 1 号 P.1-14.

加納満,　村田邦子（1994）長岡技術科学大学留学生の日本語能力および学習実態に関する調査: 教官に対する調査結果の集計報告その 1
長岡技術科学大学言語・人文科学論集, 1994

近藤裕（1981）　『カルチュア・ショックの心理』 創元社

李艶・山本理沙（2020）　在日外国人労働者のお異文化適応についての研究　その 1
聖泉論叢 No28　P.1-18.

李艶・山本理沙（2020）　在日外国人労働者のお異文化適応についての研究　その 2
聖泉論叢 No28　P.19-40.

中川　かず子（2012）日本人学生と留学生の異文化交流　ー異文化接触、協動的活動を通した大学教育への適応と意識変容ー　ウェブマガジン「留学交流」Vol.13

中川かず子，神谷順子（2000）　大学生の教育・生活に関する態度と価値観、並びに大学教育に対する適応 北海学園大学学園論集 第 106 号

小川都（2011）大学学部における留学生の日本語コミュニケーション能力および学習スキルの実態に関する研究ー共分散構造分析を通してー
専修大学外国語教育論集,　2011

鈴木一代　（1997）『異文化遭遇の心理学　ー文化・社会の中の人間ー』　ブレーン出版

清水祐士　（2016）フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案
メディア・情報・コミュニケーション研究，1，P.59-73.

高井次郎(1989)　在日外国人留学生の適応研究の総括
名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科篇　1989　　Vol 36 , P.139-47.

Trompenaars, F. and Charles H.T. (1997). Riding the Waves of Culture Shock, Nicholas Brealey Publishing
(須貝栄訳『異文化の波：グローバル社会・多様性の理解』白桃書房,　2001 年)

田中共子（1998）在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から　The Annual Report of Educational Psychology in Japan 1998, Vol.37, P.143-152.

田中共子・藤原武弘（1992）在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討
社会心理学研究　1992 年 7 巻 2 号 P. 92-101.

松原達哉・石隈利紀　1993　外国人留学生相談の実態（資料）
カウンセリング研究, 1993

岡益巳，深田博己　（1994）　中国人留学生と就学生の意識
岡山大学経済学会雑誌 26(1), 1994-06　P.1-28.

渡邉勉，今野裕之（2011）在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望
目白大学　心理学研究　No 7　2011　P.95−11.

柳佳慶，松田英子（2011）在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究 ー文化受容態度と自己効力感からの分析ー：情報と社会，2011　P.151-160.

ユーザーローカル　テキストマイニングツール（https://textmining.userlocal.jp/）

横田雅弘（1991）自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係
一橋論叢, 1991.